

謝朓詩における「窓」の風景

——遠景描寫の一手法——

はじめに

謝朓（字は玄暉、四六四—四九九）は「竟陵八友」^①の一員として、南齊の永明年間（四八三—四九二）の詩壇に活躍した人物であり、百七十首近くの詩が今に残る。^②同時代の詩人である沈約・王融らと共に永明體を大成したことに加えて、山水詩人としての評價が高く、特にその自然の描寫については、從來、多くの先行研究によつて論じられて來た。謝朓の詩を概觀した時、前半生の作品は奉和・應制の詩や唱和詩、また聯句がその大半を占めていること、そして自然の風物を詠じた詩は太守として宣城郡へ轉出した期間、すなわち建武二年（四九五年、三十二歳）^③から翌建武三年の間に多く作られたことが確認できる。都の建康から離れたこの一年餘りの間に、謝

石

碩

朓はその自然詩を大成させたと言つてよい。

その宣城期の作には、「遊敬亭山」「遊山」などの詩によつて代表されるように詩人が自然の中を散策して詠じたものと並んで、「郡內高齋閑望答呂法曹」「後齋迴望」など建物内部から自然の景色を詠じた詩が多數存在している。特に後者の詩の場合、「詩人が身を置く室内」と「室外の風景」の間に介在する「窓」の語を、謝朓は他の詩人と比べて詩中に多く用いていることが確認できる。謝朓が窓を通して何を眺め、窓にどのような役割を求めたのか、ということ明らかにすることは、宣城太守であつた時期の謝朓の風景描寫の手法を理解する上で鍵ともなる重要な點であろう。謝朓詩についての研究は少なくないが、こうした視點による論考は從來見られない。そこで本稿では謝朓詩に見られる「窓」の語の特徴と、

風景描寫におけるその機能について論じ、謝朓詩を理解する一助としたい。

なお、建物の一部としての窓、窓邊の光景、窓を通して見る景色、これらすべてを考察の対象とし、それらに關わる表現を便宜的に「窓」表現と呼ぶ。また考察の対象は、「牕」「囧」「窗」「窻」「窗」「窗」などの「窓」の異體字、また「窓」の類義語である「牖」「軒」「向」などの語である。⁽⁴⁾

第一節 謝朓以前の詩中の「窓」

人の居住する建築には窓がついているのが通常である。建物における窓の機能を端的に定義するならば、それは建物内部に造られた空間と、外界すなわち自然・社會との間に存在する透視的な境界である。その實質的な効果は、窓による採光や換氣（煙出し、建築内部の冷却）であるが、詩歌の中で「窓」表現が使用される際には、これに加えて、窓それ自體に對する描寫（建物外觀の裝飾）や窓によつて隔てられた（室内・室外の）光景の描寫、更に自己と他者の間に存在する距離の暗示などの用法が確認される。中國の古典詩歌における「窓」表現は、古くは『詩經』に見え、以後、歷代の多くの詩に現れる。「窓」表現はどのような場面で使用されていたのだろう

か。

まず、謝朓以前の詩中の「窓」表現から檢證を始めたい。

西北有高樓	西北に高樓有り
上與浮雲齊	上は浮雲と齊し
交疏結綺牕	交疏せし結綺の牕
阿閣三重階	阿閣 三重の階

（作者不詳「古詩十九首」其の五⁽⁶⁾）

鳳樓十二重	鳳樓 十二重
四戸八綺窗	四戸 八綺窗
繡栢金蓮華	繡栢 金の蓮華
桂柱玉盤龍	桂柱 玉の盤龍

（南朝宋・鮑照「代京洛篇」⁽⁷⁾）

「古詩十九首」では、建築の全體像（方角・高さ）の描寫に續いて、部分的な裝飾（窓・ひさし）に焦點が當てられる。「交疏せし結綺の牕」とは、あや模様格子が施された窓を指す。次の鮑照の詩も、建築の美を表現する上で「窓」表現が使用されている。建物全體の外觀から詠い興し、扉や窓といった建築のアクセントについて言及され、最後に室内の裝飾が

描寫される。これらは單に窓の外見にのみ注目した表現であり、建築の一部としての窓が描寫されているにすぎない。

では、窓が室外と室内を繋ぐ働きをする場合には、どのような用法が見られるのだろうか。はじめに窓のもつ機能に着眼したい。窓による「採光」は、それ自體が詩中で描かれることは少なく、窓を通して室内に差し込む光が何らかの情景もしくは詩人の心情を描く上で暗示的な働きをする場合が多い。

皎皎窗中月

皎皎たる窗中の月

照我室南端

我が室の南端を照らす

清商應秋至

清商は秋に應じて至り

溽暑隨節闌

溽暑は節に隨つて闌く……（中略）

歲寒無與同

歲寒 與に同じくするもの無きに

朗月何朧朧

朗月 何ぞ朧朧たる

展轉眄枕席

展轉して 枕席を眄れば

長簾竟牀空

長簾 牀に竟りて空し

（西晉・潘岳「悼亡詩三首」其の二）⁽⁸⁾

右に挙げた詩は、潘岳が亡き妻を想い、作ったものである。

謝朓詩における「窓」の風景（石）

室内に差し込む白々とした月の明かりは、初秋の夜の静けさを際立たせ、孤獨に月を見上げる作者の姿を照らし出す。「窓」表現は月光の媒介となるだけでなく、差し込む光によって詩人に今は亡き妻の姿を思い出させ、悼亡の念を増幅させるのである。

また「採光」と同じく重要な機能である「通氣（換氣、建築内部の冷却）」は、室内の空氣を入れ替えることが本來の目的であるが、詩中においては次に挙げる例のように、作者の注意を戸外へと誘う媒介として使用されることが多い。

秋風入窗裏

秋風 窗裏に入り

羅帳起飄颻

羅帳 起りて飄颻す

仰頭看明月

頭を仰がしめて明月を看

寄情千里光

情を寄す 千里の光に

（作者不詳「秋歌」）⁽⁹⁾

秋風が窓のうちに吹き込み、うすぎぬを垂らした帳が風にあおられて翻る。それに氣づいた詩人は明月を、おそらくは窓を通して仰ぎ見て、千里の彼方へと想いを馳せる。部屋に吹き込む「風」は詩人の注意を外へ向かわせ、「情を寄す」發

端となるのである。窓を通して室内に差し込む光や風が描寫される場合、當然ながら詩人は室内からの視點によつてこれを詠じる場合が多い。

では、詩人の視點が室外に置かれ、窓を通して室内の様子を描く場合はどうか。窓外から窓内への視線は、閨室内の女性に向けられることが多い。閨怨詩の中に「樓上の思婦」をモチーフとするものが存在することは、つとに指摘されるところであるが、¹⁰⁾そもそもこのイメージの原型となつた「古詩十九首」では、女性が身を置くのは樓上であり、さらにその「窓邊」であつた。

青青河畔草	青青たる河畔の草
鬱鬱園中柳	鬱鬱たる園中の柳
盈盈樓上女	盈盈たる樓上の女
皎皎當窗牖	皎皎として窗牖に當る… (中略)
蕩子行不歸	蕩子 行きて歸らず
空牀難獨守	空牀 獨り守ること難し

(作者不詳「古詩十九首」其の二)¹¹⁾

河畔の草、屋敷の庭の柳、建物の上、そして窓邊に佇む美

しい女性。作者の視線は徐々に閨室の中の婦人へと絞り込まれてゆく。女性が窓邊に佇むのは、夫の歸りを待ちわび、愛しい人のいる方角を眺めるためであろう。窓は「樓上の女」と歸らぬ「蕩子」とを結びつける接點であり、女性のいる閨室と夫のいる外界は、窓によつて繋がりを持つ。更に、この場合の「窓」表現は、女性が閨室から出られない存在であることを讀者に示唆する。歸らぬ夫を待ち、「獨り空牀を守る」ことしかできない。女性を閉じ込めているのは婚姻であり、建物である。窓が外界と接する唯一のルートであるために、女性が身を置く空間の閉塞性は一層際立つ。讀者はいわば「窓」という装置を通して、本來密閉された空間であるはずの閨室、そしてその中で夫の歸りを待つ女性の姿を垣間見るのである。窓は閨室の中にいる女性にとつても、閨室の外にいる詩人・讀者にとつても、室内と室外の間に作られた唯一の接點なのである。

では、詩人が窓を通して室内から室外へ視線を向ける場合はどうかであろうか。はじめに陶淵明(三六五—四二七)の詩を例に挙げ、窓外の描寫について考察したい。

(第一節) 靜寄東軒 靜かに東軒に寄り

春醪獨撫

春醪 獨り撫す

良朋悠邈

良朋 悠邈たり

搔首延佇

首を搔きて延佇す… (中略)

(第二節)

有酒有酒

酒有り 酒有り

閑飲東窗

閑かに東窓に飲む

願言懷人

願ひて言^{われ} 人を懷へども

舟車靡從

舟車 從ふ靡し… (中略)

(第三節)

東園之樹

東園の樹

枝條載榮

枝條 載^はめて榮え

競用新好

競ひて新好を用ひて

以怡余情

以て余が情を怡^{たのし}ましむ… (中略)(東晉・陶淵明「停雲」⁽¹²⁾)

本詩が室内からの視線によつて詠じられていることは、第一節の「東軒に寄り」、第二節の「東窓に飲む」の句によつて確認できる。一人酒を飲みながら遠くの友へと想いを馳せるものの、會いに行く手立てはない。そこで詩人は仕方なく、窓の外に美しく咲き競う木々の花を眺めて心を慰めるのである。

榮榮窗下蘭

榮榮たり 窗下の蘭

密密堂前柳

密密たり 堂前の柳

(陶淵明「擬古九首」其の二)⁽¹³⁾

この詩では「窓下の蘭」「堂前の柳」と、前詩より具體的に窓邊の風景を描寫している。「窓」表現を含む陶淵明の詩には、上記二首と「問來使」詩(「我屋南窗下、今生幾叢菊」⁽¹⁴⁾)を併せた三首が見られるが、いずれも詩人が窓を通して眺める對象は目の前の近景であつた。

また、窓から見える比較的遠くの景色を詠じた作品もあるが、これは謝靈運(三八五—四三三)の詩に至つて、初めて現れるようである。謝靈運詩では「窓」表現が三例確認でき、うち一首は閨室の窓を描寫したものであり、他の二首は中景・遠景の描寫がなされたものであつた。一首目は次の通りである。

絶溜飛庭前

絶溜は 庭前に飛ぶ

高林映窗裏

高林は 窗裏に映ず

禪室栖空觀

禪室に空觀栖^わみ

講宇析妙理

講宇にて妙理を析^わたん

(南朝宋・謝靈運「石壁立招提精舍」⁽¹⁵⁾)

詩題の「招提精舍」とは、謝靈運が僧侶のために建てた修行と宿泊のための施設である。庭先の瀧の飛沫は近景と思われるが、引用した二句目の「高林は窓裏に映ず」は、窓越しに高い林が見えていることを詠ったものであり、前出の陶淵明の詩に比べて比較的遠くの景色が描寫されている。しかしどちらの景色も佛舎を彩るものとして詠じられており、風景そのものを謝靈運が意識的に眺めている様子はない。窓外の遠景表現を含む二首目は次の通り。

激澗代汲井 澗を激ぎて汲井に代へ

插槿當列墉 槿を插ゑて列墉に當つ

羣木既羅戸 羣木は 既に戸に羅なり

衆山亦對窓 衆山も 亦た窓に對す

(謝靈運「田南樹園激流植援」)

本詩は謝靈運が庭園に家を建てた時の作品である。「衆山も亦た窓に對す」⁽¹⁶⁾の句は、窓の奥に向いあつて見える景色(山々)を詠ったものであり、作者は家の完成に期待を寄せて、

前詩同様、建物を彩る風景を描寫したものと思われる。この句はいわば「窓を額縁に例えた表現」⁽¹⁷⁾であり、窓というフレームによつて景色を切り取り、一枚の繪のように遠景を描寫している點が特徴的である。謝靈運の詩を平面的な繪畫に喩えたのは、「眺める」などの動作によつて詩人が意識的に選り取った景色ではなく、客觀的にそこに存在する景色を描寫しているからである。そのため表現からは奥行きが感じられず、終始平面的な印象を讀者に與えるのである。窓を通した遠景の描寫は、謝靈運を除いて後述する謝朓に至るまで作例を確認できず、一般的な表現であつたとは言えない。

整理すると、詩中における「窓」表現は大きく分けて以下の五つに分類できる。①建築の一部としての窓を描寫する。②窓から室内に差し込む(吹き込む)光・風を描寫する。③閨室の窓を描寫し、女性を連想させる。④窓を通して見える近景を描寫する。⑤窓を通して見える中景・遠景を描寫する。ここでは便宜的に〈建築〉〈光・風〉〈閨室〉〈近景〉〈遠景〉と略稱し、論を進めたい。

第二節 謝朓詩における「窓」

それでは、謝朓詩に見える「窓」表現には、どのような特

徴があるのだろうか。四部叢刊本『謝宣城詩集』を底本とし、謝朓詩に見える「窓」表現を調査したところ、その使用場面の分布は以下の通りであつた。⁽¹⁸⁾（アルファベットは筆者による）

① 建築の描寫	三首	玲瓏結綺錢、深沈映朱網	A
卷三「直中書省」		關館臨秋風、敞窓望寒旭	B
卷三「治宅」		嚴氣集高軒、稠陰結寒樹	C
卷五「奉和隨王殿下	其三		
② 光・風の描寫	二首	清風動簾夜、孤月照窓時	D
卷三「懷故人」		雲生樹陰遠、軒廣月容開	E
卷五「奉和隨王殿下	其七		
③ 閨室の描寫	二首	北窓輕幔垂、西戶月光入	F
卷三「秋夜」		日落窓中坐、紅粧好顏色	G
卷四「贈王主簿二首	其一		
④ 近景の描寫	四首	便娟綺窓北、結根未參差	H
卷二「秋竹曲」		前窓一叢竹、青翠獨言奇	I
卷五「詠竹」		孤桐北窓外、高枝百尺餘	J
卷五「遊東堂詠桐」		紫葵窓外舒、青荷池上出	K
聯句「閒坐」			
⑤ 遠景の描寫	六首		

謝朓詩における「窓」の風景（石）

卷三「冬日晚郡事隙」

颯颯滿池荷、條條蔭牕竹：

卷三「後齋迴望」

蒼翠望寒山、崢嶸瞰平陸 L

卷三「落日悵望」

高軒瞰四野、臨牕眺襟帶 M

卷三「郡內高齋閑望答呂法曹」

落日餘清陰、高枕東牕下 N

卷四「夏始和劉潺陵」

窓中遠岫列、庭際俯喬林 O

卷四「新治北窗和何從事」

對窓斜日過、洞幌鮮飈入 P

關牕期清曠、開簾候風景：池北樹如浮、竹外山猶影 Q

「窓」表現を含む詩は全部で十七首見られ、百七十首近く存在する謝朓詩の約十分の一にあたる。これは以前の詩人に比べて際立って多い。⁽¹⁹⁾ 具體的な使用場面を見ると、〈建築〉〈光・風〉〈閨室〉〈近景〉の分布に著しい數量的偏りは見られないものの、最後に列挙した〈遠景〉が相對的に最も多く、全體の約三分の一を占めていることが分かる。次に、「窓」表現を含む謝朓詩の製作時期を、現在概ね認められている説⁽²⁰⁾に従って見てみると、他四つの描寫が各製作時期に平均的に分散しているのに對し、〈遠景〉のみは、謝朓が宣城太守を務めた時期に集中していることが分かる（後掲の表を参照されたい）。蕭鸞（後の明帝）が延興元年（四九四年）に海陵王を即位させ、

自ら輔政の地位についた頃から、謝朓は逝去した武帝派から明帝派へと政治的立場を移行する。宣城はかつて明帝が治めた場所であり、政治的にも非常に重視された土地であった。建武二年（四九五年）の夏、謝朓は明帝の期待を背負い、都の建康を離れ、南に二百キロ餘り離れた宣城郡へと赴いた。そして翌年の初冬に建康へ戻るまでの一年間餘りを、太守としてこの地で過ごしたのである。⁽²¹⁾この時期に多く見られる〈遠景〉の「窓」表現は、具體的にどのような作品であつたのか。そして、なぜこれらのような作品が出現することになったのだろうか。

第三節 謝朓詩の「窓」表現と遠景の描寫

詩歌における「窓」を通した〈遠景〉の描寫は、前述の通り、謝靈運に至るまで見られない。謝朓の詩には、用語や表現の點で謝靈運に學んだものが多いことが指摘されるが、〈遠景〉の「窓」表現もやはり、謝靈運の作品に倣つたものなのだろうか。以下、個別に詩を取り上げて分析したい。

案牘時間暇

案牘 時に閒暇あり

偶坐觀卉木

偶たま坐して 卉木を觀る

颯颯滿池荷	颯颯たり	池に滿つるの荷
條條蔭牕竹	條條たり	牕を蔭ふの竹
簷隙自周流	簷隙は自ら周流し	
房櫳閑且肅	房櫳は 閑にして且つ肅	
蒼翠望寒山	蒼翠 寒山を望み	
崢嶸瞰平陸	崢嶸 平陸を瞰む	
已惕慕歸心	已に慕歸の心を惕へしめ	
復傷千里目	復た千里の目を傷ましむ	
風霜旦夕甚	風霜 旦夕に甚だしく	
蕙草無芬馥	蕙草 芬馥たる無し	
云誰美笙簧	云誰ぞ 笙簧を美とせん	
孰是厭邁軸	孰か是れ 邁軸を厭はん	
願言追逸駕	願言はくは 逸駕を税き	
臨潭餌秋菊	潭に臨んで 秋菊を餌はん	

（卷三「冬日晚郡事隙」五言十六句上）

宣城郡内の作。詩題の「郡事の隙に」、一句目の「閒暇あり」、二句目の「偶ま坐して」の表現から、詩人は執務を行う場所において、公務の合間に詩を詠じていることが分かる。四句目の「牕を蔭ふの竹」は窓邊の植物、すなわち〈近景〉

を描寫しているが、七句目において望む「寒山」、八句目において俯瞰する「平陸」も、（室内で坐つたまま、という作者の言葉に據れば）やはり同じ窓から見た風景であると思われる。詩人の視線は窓を通して窓邊の竹をくぐり抜け、近くの景色から次第に遠くの景色へと廣がつてゆく。遠景とともに近景を配することによって、謝靈運の詩では描寫し得なかつた空間の奥行きが表現されているのである。このように立體的に（遠景）の描寫を行うことで、謝朓の視線は自身が能動的に眺めた風景とともに窓外に廣がる世界へと移り、それによって望郷の想い・隱遁への憧れといった心情が喚起される。謝朓詩の場合、遠景は窓に映つた景色ではなく、詩人が意識的に眺めた風景なのである。このような表現の特徴は、次に挙げる詩において更にはつきりと確認できる。

高軒瞰四野	高軒より	四野を瞰め
臨牖眺襟帶	牖に臨みて	襟帶を眺む
望山白雲裏	山を望む	白雲の裏
望水平原外	水を望む	平原の外
夏木轉成帷	夏の木は	轉た帷を成し
秋荷漸如蓋	秋の荷は	漸く蓋の如し

謝朓詩における「窓」の風景（石）

鞏洛常睠然 鞏洛は 常に睠然として
 搖心似懸旆 搖心は 懸旆けんはいに似たり

（卷三「後齋迴望」五言八句M）

一句目の「瞰め」、二句目の「臨みて」「眺む」、三句目・四句目の「望む」など、能動的な動詞が多用されている。建物の「高軒」の「牖」から山（白雲）や川（平原）の遠景を眺めた後、木や荷などの近景・中景によつて季節の移り變わりを感じ、最後に望郷の想いが詠じられている。次に挙げる詩もやはり宣城郡において作られたもので、官舎のある高殿から眺めた風景が描かれている。

結構何迢遰	結構	何ぞ迢遰 <small>てうてい</small> たる
曠望極高深	曠望	高深を極む
窓中列遠岫	窓中に	遠岫を列ね
庭際俯喬林	庭際に	喬林を俯しながむ
日出衆鳥散	日出でて	衆鳥は散じ
山暝孤猿吟	山暝れて	孤猿は吟く
已有池上酌	已に	池上の酌有り
復此風中琴	復た	此の風中の琴あり

中國文學研究 第三十六期

非君美無度 君が 美の度^{はか}る無きに非ざれば

孰爲勞寸心 孰か 爲に寸心を勞せん

惠而能好我 惠^{いつく}しみて 能く我^{よみ}を好し

問以瑤華音 問^おるに瑤華の音を以てす

若遺金門步 若し 金門の歩みを遺^すてなば

見就此山岑 此の山の岑^{みね}に就かれよ

(卷三「郡内高齋閑望答呂法曹」五言十四句〇)

山と川、遠景と近景、朝と夕、酒と音楽などの具體的な風景の描寫によつて、謝朓の視線が窓外の世界を「曠望」し、自由に巡らされていることが分かる。三句目・四句目の構造は、前出の謝靈運の句、「羣木は 既に戸に羅なり／衆山も亦た窓に對す」(「田南樹園激流植援」)に似ており、表現を參考したものと思われるが、謝靈運詩が平面的な描寫であつたのに對して、謝朓詩は遠景(遠岫)に中景(喬林)を配し、更に「俯す」という上からのぞき込む動作によつて、立體的な描寫を實現している。⁽²³⁾更に、詩中に見える窓外の様々な風景を描寫することによつて、窓内と窓外の間に存在する距離が意識され、それを契機に詩人は遠く離れた場所にいる友人に思いを馳せるのである。また、謝朓詩における「遠景」の「窓」

表現には、作者の視線が窓外の世界に巡らされたまま、室内、すなわち官舎の中に戻ることはない、という特徴がある。本詩の場合、末句にて宣城郡(にある役所)を「此山岑」と喩えてはいるものの、これはあくまで呂法曹に向けられた言葉であり、外部からの視線によつて詠じているのである。次の詩は、謝朓が窓を作り、友人の詩に和した作品である。

國小暇日多	國小にして 暇日 多く
民淳紛務屏	民淳くして 紛務 屏 ^{しりぞ} く
闢牖期清曠	牖を闢きて 清曠を期し
開簾候風景	簾を開きて 風景を候 ^ま つ
泱泱日照溪	泱泱として 日は溪を照らし
團團雲出嶺	團團として 雲は嶺を出づ
苕蕘蘭橈峻	苕蕘として 蘭の橈 ^{たるき} は峻く
駢闐石路整	駢闐として 石路は整ふ
池北樹如浮	池北に 樹は浮かぶが如く
竹外山猶影	竹外に 山は猶ほ影のごとし
自來彌弦望	自來 弦望 ^{わた} を彌り
及君臨箕穎	君の 箕穎に臨むに及ぶ
清文蔚且詠	清文 蔚として且つ詠じ

微言超已領 微言 超として已に領す

不見城壕側 見えず 城壕の側り

思君朝夕頃 君を思ふ 朝夕の頃

迴舟方在辰 舟を迴すは 方に辰に在り

何以慰延頸 何を以て 頸を延くを慰めん

(卷四「新治北窗和何從事」五言十八句Q)

詩題の「治窓」、すなわち窓を作ったことを詩に詠むのは、謝朓詩の他に例がない。その経緯は不明であるが、詩中に述べられているように、さわやかな気持ちになることを願い(「清曠を期す」、窓外に廣がる自然の風光を迎える(「風景を候つ」)ために窓が作られた可能性は十分にあるだろう。窓外へ向けられた詩人の視線は、比較的身近な風景である「溪」から遠くの「雲」「峰」へ廣がり、再び近景の「蘭の櫟」「石の路」に視点を戻し、「池」⁽²⁴⁾「樹々」「竹林」の中景を経て、再度遠景の「山」へと巡らされる。窓外の近・中・遠、様々な景色を描き終えた所で、詩人は何従事に對する惜別の念を詠い、最後は首を伸ばして友人を見送る自身の姿で締めくくられる。以上、謝朓の「窓」表現が、①遠景とともに近景・中景を配置したこと、②作者が意識的に窓外へ視線を向けたことに

謝朓詩における「窓」の風景(石)

よって立體的な描寫が實現され、隱遁・望郷・惜別など、窓外の遠景に付隨して様々な感情が詠じられたことが確認できた。これは謝靈運の〈遠景〉描寫を進化・發展させたものであり、謝朓以前には見られない用法である。特に最後に挙げた「新治北窗和何從事」のような「窓を作る」という詩をあえて詠じたことは、謝朓が窓から見える風景を重視していたことを示唆しているのではないだろうか。

第四節 謝朓周邊の詩人の「窓」表現

では、謝朓の同時代において「意識的に窓から遠景を眺める」表現は一般的であったのだろうか。齊・梁の詩人を對象に調査を行い、以下に代表的な例を挙げる。

井蓮當夏吐 井の蓮 夏に當りて吐き
窗桂逐秋開 窗の桂 秋を逐ひて 開く

(南齊・王融「臨高臺」⁽²⁵⁾)

愁人掩軒臥 愁人 軒を掩いて臥し
高窗時動扉 高窗 時に扉を動かす

(梁・沈約「直學省愁臥」⁽²⁶⁾)

朝日照綺窗 朝日 綺窗を照らし

中國文學研究 第三十六期

光風動紈羅 光風 紈羅を動かす

(梁武帝・蕭衍「子夜歌二首」其の二)⁽²⁷⁾

粧窗隔柳色 妝窗 柳色を隔て

井水照桃紅 井水 桃紅に照す^{うづ}(簡文帝・蕭綱「和湘東王名士悅傾城」)⁽²⁸⁾

山際見來煙 山際に來煙を見

竹中窺落日 竹中に落日を窺ふ

鳥向簷上飛 鳥は簷上に向かひて飛び

雲從窗裏出 雲は窗裏より出づ

(梁・吳均「山中雜詩三首」其の一)⁽³⁰⁾

王融の詩は窓邊の近景を描寫したものであり、沈約の詩は窓に風が吹きつけることを詠じた句である。また、蕭衍の詩は朝日が飾り窓を照らすという表現によって、建築の美しさと部屋に光が差し込むことを描寫しており、蕭綱の詩は空閨にたたずむ美人を連想させる表現である。遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』によつて調査したところ、齊・梁詩のうち、意識して遠景を描寫したと思われる「窓」表現は以下に挙げる二首のみであつた。

南望南郭門 南のかた南の郭門を望めば

拱樹稍雲密 拱樹 稍雲に密し^{ちか}北窗北湊道 北窗 北に湊く^{おもむ}の道

重樓霧中出 重樓 霧の中より出づ

(梁・何遜「登禪岡寺望和虞記室」)⁽²⁹⁾

何遜の詩は、作者のいる位置が明確でないものの、おそらくは寺の窓から遠くへ續く道を眺めた作品であろう。吳均の詩は、作者が室内で詠んだ詩と考えるならば、一句目の「見」、二句目の「窺ふ」の語によつて、作者が「窓」を通して遠景を眺めていると解釋し得る。しかし二首ともに、謝朓の詩と同じ表現ととらえるには根據が不足する感を否めない。梁代の詩には「窓」表現が多く確認できるものの、〈遠景〉の使用例はほとんどなく、特に宮體詩が收録される『玉臺新詠』では「窓」表現四十七例のうち、〈建築〉八例、〈光・風〉十例、〈閨室〉二十二例、〈近景〉七例であり、〈遠景〉に相當する使用例は檢し得ない。謝朓詩に見える〈遠景〉の「窓」表現が、當時においていかに特殊なものであつたかを物語るだろう。

おわりに

本稿では、中國の古典詩歌における「窓」表現を〈建築〉〈光・風〉〈閨室〉〈近景〉〈遠景〉の五つの使用場面に分類し、特に〈遠景〉について重點的に考察をすすめてきた。〈遠景〉の作例は謝朓に至るまできわめて少なく、わずかに謝靈運の詩に確認できるのみで、その表現も非常に平面的なものであった。謝靈運の詩は限定的な風景の描寫に終始しており、そのため作者の視線の轉移が見られず、奥行きのない表現にとどまっているのである。

一方で謝朓の詩は、作者が能動的に窓から遠景を眺めており、更に遠景と併せて近景・中景を描寫することで、表現に立體感を持たせることに成功している。「窓」表現に伴う「望む」「瞰む」「眺む」などの動詞の使用や、遠景とともに描かれる詩人の心情によって、描寫される風景に奥行きが生じるのである。窓から見える遠景を描寫することは、従來の「窓」表現に新たな要素を加えたばかりでなく、後に遠景一般を描寫する際の一つの手法として、「窗含西嶺千秋雪」（杜甫「絶句四首」其三）、「開窗碧嶂滿」（李白「憶襄陽舊遊贈馬少府巨」）、「千里一窗裏」（錢起「藍田溪雜詠二十二首」窗裏山）などの句に

代表されるような、唐代以降の「窓から遠景を眺める」詩の發展へと繋がっていくものと考えられる。「窓」表現はここにおいて、遠景描寫の表現技巧が進化し、發展していく過程を考察する上で、重要な視點を獲得したのである。

では、なぜ謝朓は「窓」の語を用いて遠景を描寫したのだろうか。〈遠景〉の詩は詩人が宣城太守に着任していた時期に集中しており、描かれる心情は、隱遁に對する憧憬、望郷の想い、友人への惜別の念など、多種多様である。これらの詩に共通しているのは、①叙情に先だって窓外の風景が描寫されていること、②官舎の中では實現し得ない願望が詠じられていること、の二點である。詩人の視線は「窓」を通して宣城郡の官舎を離れ、「窓」によって外に廣がる世界を眺めることが可能となり、更には「窓」から見える風景によって歸心や隱遁といった、官舎の中では實現し得ない思いが喚起される。「窓」は室外の風景を媒介するばかりでなく、同時に現實の世界（官舎の中）から自己の内面の世界へと詩人の意識を轉換させる装置でもあるのだ。謝朓詩における「窓」表現はこのような、風景の描寫と叙情の導入という二重の役割を果たしているのである。

「窓」表現を含む謝朓詩に詠じられる個々の心情については、

宣城郡における詩人の心理的な葛藤に關係すると思われるが、これには謝朓を取り巻く政治的な背景や、當時流行していた隱遁思想、謝靈運に對する意識、そして宣城という風土（自然環境、政治的環境）などの點に留意して、慎重に検討しなければならぬだろう。こうした背景によつて形作られた謝朓の詩風とその用語の特徴に關しては、また稿を改めて論ずることとしたい。

注

- (1) 『梁書』卷一・武帝紀上に「竟陵王子良開西邸、招文學。高祖與沈約・謝朓・王融・蕭琛・范雲・任昉・陸倕等並遊焉、號曰八友」とある。
- (2) 四部叢刊本『謝宣城集』に收録される詩は二百七首であるが、沈約・柳惲らの詩が四十首含まれるため、謝朓の作は百六十七首である（聯句七首を含む）。
- (3) 謝朓詩の製作時期については、森野繁夫『謝宣城詩集』（白帝社、一九九一）、網祐次「謝朓の傳記と作品」（『お茶の水大學人文科學紀要』第七集、一九五五）、劉躍進・范子燁編『六朝作家年譜輯要』（黑龍江教育出版社、一九九九）に收める曹融南「謝朓事跡詩文系年」を參照した。
- (4) 段玉裁注『說文解字注』（上海古籍出版社、一九九六）、任繼昉纂『釋名匯校』（齊魯書社、二〇〇六）、『辭源』（商務印書館

一九七八）を參照した。なお、「軒」の字は窓の意で使われる場合のみ「窓」表現に數えた。

- (5) 『詩經』國風・召南「采蘋」に「于以奠之、宗室牖下。誰其尸之、有齊季女」とあり、ここでは供物を配置する特定の場所として「窓」表現が用いられている。また、同じく『詩經』の國風・邶風「鴟鴞」に「迨天之未陰雨、徹彼桑土、綢繆牖戶。今女下民、或敢侮予」とあり、こちらは通氣口としての「窓」の機能である。

- (6) 『文選』卷二十九（以下、上海古籍出版社排印本『文選』を底本とする）。
- (7) 『玉臺新詠』卷四（以下、中華書局排印本『玉臺新詠箋注』を底本とする）。
- (8) 『文選』卷二十三。
- (9) 『玉臺新詠』卷十・近代吳歌九首。
- (10) 矢嶋美都子「樓上の思婦——閨怨詩のモチーフの展開——」（『日本中國學會報』第三十七集、一九八五）に詳しい。
- (11) 『文選』卷二十九。
- (12) 『陶淵明集』卷一（以下、袁行霽撰『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三）を底本とする）。
- (13) 『陶淵明集』卷四。
- (14) 『陶淵明集』外集。
- (15) 『古詩紀』卷四十八（嘉靖本、汲古書院、二〇〇五）。
- (16) 『文選』卷三十では「對」の字に作り、『謝靈運集校注』も同じ字を採用しているが、『古詩紀』卷四十八では「對」の字を

「當」に作る。この場合も同様に、窓と山々が向いあっている、という意味である。

- (17) 森野繁夫『謝宣城詩集』（白帝社、一九九一）は「窓中に遠岫を列ね／庭際に喬林を俯しながむ」の二句について「謝朓は（謝）靈運の此の句（「羣木は既に戸に羅なり／衆山も亦た窓に對す」（田南樹園激流植援）」を参考にして、窓の中に山なみが連なっていると、窓を額縁のように見立てた表現にしている」と指摘している。

- (18) 複数の「窓」表現が混在して使用されている場合は、より重點的に描寫されているものに従い、分類した。

- (19) 「窓」表現を含む詩を比較的多く残している詩人は以下の通りである。（一）内は總數。

陶淵明三首（百二十五首中）、「停雲」「問來使」「擬古九首其一」。鮑照五首（百九十八首中）、「代朗月行」「紹古辭七首其四」「翫月城西門廨中」「中興歌十首 其四」「擬行路難十八首 其三」。謝靈運三首（百首中）、「燕歌行」「石壁立招提精舍」「田南樹園激流植援」。江淹六首（九十三首中）、「雜體詩三十首 潘黃門岳述哀」「雜體詩三十首 郭弘農璞遊仙」「悼室人十首 其五」「訪道經」「鏡論語」「悅曲池」。

個々の詩人の詩全體の量から見ても、その割合が謝朓に比べて少ないことが分かる。

- (20) 注（3）を参照。

- (21) 謝朓が宣城へ就任した経緯とその時の心情については、佐藤正光「宣城時代の謝朓」（『日本中國學會報』第四十一集、

謝朓詩における「窓」の風景（石）

一九八九）、森野繁夫「謝朓研究——宣城郡における謝朓——」（『中國中世文學研究』第二十二號、一九九二）に詳しい。

- (22) 洪順隆「謝朓の作品に對する其の先祖の投影」（『東方學』第五十二輯、一九七六）では、作品のモチーフ、詩中の用語、作品の表現方法、作品の風格などについて、謝靈運に對する謝朓の意識を検證している。

- (23) 赤井益久『國學院雜誌』九十七卷・第一號「白詩風景小考——「竹窓」と「小池」を中心として——」は、窓の位置と立體感に注目して「戸に連なる木々、窓からみえる山脈、謝朓の作が全體格的にやや奥行きを與えるのは、作者と遠くの峰との間に窓を置き、「俯す」という鳥瞰的な視角によると思われる」と指摘している。

- (24) 『古詩賞析』卷十八では該當箇所について「池中水滿、峯樹如浮、竹謂茂密、猶露山影也」と評している。ここでは「池」と「竹」を、向こうに見える「樹」と「山」の遠景を際立たせるための中間的な風景としてとらえた。

- (25) 遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』齊詩・卷二（中華書局、一九八三）。

- (26) 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩・卷六。

- (27) 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩・卷一。

- (28) 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩・卷二十一。

- (29) 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁卷・卷九では「溱」の字に作るが、『何遜集校注』（中華書局、二〇一〇）では「溱」字に改めているため、本稿でも「溱」字を採用した。

- (30) 『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩・卷十一。
 (31) 「窓」四十二例、「牖」九例（うち、「窓牖」四例）であった。
 (32) 唐詩の引用は『全唐詩』（中華書局排印本）に従う。

表：「窓」表現を含む謝朓詩の製作時期

製作時期（年齢） 「窓」表現の分類	建築	光・風	閨室	近景	遠景
482～490（19～27） 竟陵八友（建康）					
490～493（27～30） 荊州刺史の功曹、文學	G	J K			P
493～495（30～32） 蕭鸞の驃騎諮議・領記室、 中書郎（建康）	E		I		
495～496（32～33） 宣城太守（宣城郡）				A D	L M N O Q
496～497（33～34） 中書郎（建康）					
497～498（34～35） 南東海太守（南東海郡）					
498～499（35～36） 尚書吏部郎（建康）	F				
不明			H	B C	